

# 万葉集に詠まれた鎌倉の地



八柳 修之

新しい元号は「令和」と決まった。英語説明では beautiful harmony というそうでイイネ。典拠となった万葉集は奈良時代に完成した日本最古の歌集である。万葉集は全 20 巻から成り、約 250 年間にわたって詠まれた 4536 首を集められている。額田王、柿本人麻呂、山上憶良ら教科書に出て来る代表的な歌人のほか、天皇から防人、無名の農民に至るまで幅広い歌人、地方の歌も多くあるという。

ネットで調べると 4536 首の歌の中に神奈川県内で詠まれ歌碑があるのは僅か 25 首である。そのうち湘南・鎌倉地方に限ると鎌倉で詠まれた 3 首のみ、いずれも詠み人知らずである。鎌倉には関係碑が二か所あることが分かったので閑人は早速訪ねてみた。一つは長谷の甘縄神社にある歌碑、もう一つ美奈能瀬川（みなのおせがわ）現在の稲瀬川の河口に案内碑がある。

## 甘縄神社内の歌碑

鎌倉市長谷 1-12-1 江ノ電長谷駅徒歩 7 分 約 600m

祭神は天照大神、社伝によると 710（和銅 3）年に鎌倉の豪族染谷時忠が創建し、源頼義が祈願して源頼義家が生まれ、その義家が 1081（永保元）年に再建したと伝えられる。「吾妻鏡」には「伊勢別宮」と記されているようで、大庭御厨の内に祀られた神明社、各地に建立された神明社の先駆ともいえるという。甘縄の「甘」は海女のこと、「縄」は漁をするときの縄という説がある。甘縄神社の創建は 710 年だから、万葉時代にはすでにこの神社があったことが分かる。件の歌碑は、鳥居をくぐり神殿への 45 段の石段を上る手前の手水舎の後ろに建っていた。

鎌倉の見越しの崎の石崩（いはくえ）の君が悔ゆべき心は持たじ 卷 14—3365  
詠み人知らず。

大意は鎌倉の見越しの崎の崩れ岩のように あなたが後悔するようなことは決して持ちません。

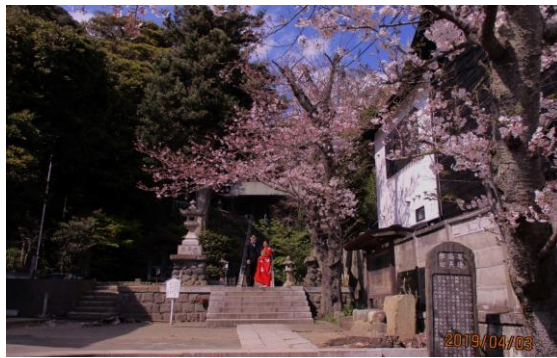
相聞の歌、女性の歌である。見越しの崎、石崩とは波で岩が崩れた所、稲村ヶ崎ではないかと言われている。稲村ヶ崎と推定されるならば、なぜここ甘縄神社に碑が建てられたのか疑問が残る。歌碑は新しく裏面に平成 7（1995）年施主材木座 進藤実とあった。熱心な万葉フアンのようなだ。



歌碑は手水舎の後ろにある。



本殿



咲き誇る桜の下で新婚夫婦記念撮影

甘縄神社境内では折柄、桜が満開、新婚夫婦が記念撮影していた。この歌をはなむけに旦那さんにお贈りしたい。同じ歌の歌碑は鎌倉文学館内にもあるという。

## 由比ヶ浜の万葉関連碑

由比ヶ浜4丁目 国道134号線の海側、長谷2丁目との境界  
甘縄神社の参道をもと来た道を真直ぐ海側に歩く。途中、江ノ電長谷3号踏切を渡り狭い小道を進むと3mほどの石造りの榮橋がある。その下を流れる小川が稲瀬川である。50mほど歩くと国道134号線、稲瀬川河口、3~4mの稲瀬川橋があった。万葉集に詠まれた美奈能瀬川（みなのがわ）と呼ばれたこの川はかつては鎌倉の境であった。

ま愛（かな）しみ さ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つむなか 卷14—3366  
読み人知らず

大意：あの娘が心からいとおしいので、共寝をしに出かけよう。鎌倉の美奈の瀬川は潮が満ちている頃であろうか。

道路を挟んで海側に大正12年3月に鎌倉町青年団が建てた案内碑がある「万葉に鎌倉の美奈能瀬河（ママ）とあるは此の河なり」。稲瀬川は写真に見るごとく海に到達する前に幅2mほどとなる川というより小川である。往時は水量が豊富であったことであろう。この地点には関東ふれあいの道の案内柱が立っており、鎌倉駅へ1.9km、稲村ヶ崎へ1.7km、滑川橋へ0.6kmの地点である。美奈能瀬川と呼ばれた時代、この川は鎌倉の境で、1185（文治元）年、頼朝は父義朝の遺骨をこの川まで出迎えている。また新田軍の鎌倉攻めの際の激戦地として、歌舞伎で「青砥稿紅花彩画」の白波五人男の稲瀬川堤の勢揃いの場としても有名なそうである。



長さ3m余りの稲瀬川橋



鎌倉青年団が建てた稲瀬川案内碑



稲瀬川河口



青砥稿紅花彩画 白波五人男 稲瀬川堤の勢揃いの場

稲瀬川堤の勢揃いの場 堤という言葉、果たしてここに堤があったのか現在の稲瀬川からは想像できない。

参考：青砥稿紅花彩画 文久2年（1862）に江戸市村座で初演された歌舞伎の演目。

通称「白波波五人男」二代目河竹黙阿弥の作。全3幕9場

日本駄右衛門 ～問われて名乗るのもおこがまわしいが、産まれは遠州浜松在～ 賊徒の首領  
弁天小僧菊之輔 ～さて次は江ノ島の岩本院の児上がり～ 女に化けた美人局  
忠信利平 西に東に神出鬼没 赤星十三郎 元は小姓の美少年  
南郷力丸 漁師から転じた強盗

## 鎌倉山

鎌倉がらみの歌としては、もう一首あったが歌碑はない。

薪伐（こ）る鎌倉山の木垂（こだる）木を松と汝（な）が云はば恋ひつつやあらむ

卷14—3433 読み人しらず

大意：薪を切る鎌という名を持つ鎌倉山 そこに生茂る木々を松（待つ）とあなたが言ってくれなければ、こんなにも恋にもだえることもないのに

松と待つは掛けことばになっている。

鎌倉山は現在、地名となっている鎌倉山の特定の場所を示すものではなく、鎌倉の山々の総称とされている。したがって歌碑もないが、万葉ブームが起きどこかに建てられるかもしれない。

鎌倉山と呼ぶようになるのは昭和初期、実業家（政商とも）の菅原通斉が名づけて別荘地として開発した以降のことである。

追記：甘縄神社にあった歌と同じ歌碑が鎌倉文学館にあった。

歌碑は入場券売り場、左前方にあり燈籠風のもので昭和60年、

（1985）、開館とほぼ同時に建てられたものであった。

参考引用文献：

「鎌倉散歩」神奈川県高等学校教科研究会社会部会歴史文化会 山川出版社  
「万葉集全訳」講談社文庫、「日本史広辞典」山川出版社、甘縄神社 HP  
万葉歌碑めぐり ネットなど

